女子大学生の友人関係における内的作業モデルと怒りとの関連

Associations of Internal Working Models and Anger in Friendship of Female University Students

小林　良子*　　伊東　真里**　　末田　啓二***
RYOKO KOBAYASHI　　MARI ITO　　KEIJI SUEDA

＜要旨＞
本研究の目的は、友達とのつきあい方によって、愛着理論における内的作業モデル（Internal Working Models:IWM）と怒りとの関連を検討することであった。女子大生303名を対象に友達とのつきあい方を4つのパターンにわけ、愛着の個人差を反映する内的作業モデルを測定するためにECR-GO と怒りの表現の仕方およびパーソナリティ特性としての怒りやすさを測定するSTAXIを実施した結果、友達とのつきあい方との関連は、内的作業モデルのほうが怒りの表出の仕方および怒り特性より強い関連が見られた。

キーワード：女子大学生、友人関係、内的作業モデル、怒り

第１章　　問題と目的

第１節 はじめに

エリクソン（Erikson, 1959）は、人の発達課題をそれぞれに時期があり連続性の中で芽生え、時を得てその人の中で問題となって現れるとしている。特に青年期の課題である「自我同一性（アイデンティティ）の確立」はそれまでの課題が集約される形で、また成人期に向けて必須の課題として現われてくると述べている。ただし、これらはその人自身に関する問題であると共に、その人につながっている他者との関係の問題であることが多い。そのため、アイデンティティの確立は、他者の存在なくしてはなしえないと考えられる。私たちは毎日、人との関係性の中で生きている。青年期における重要な他者は友人であるため、友人との関係は良好な時には力となって自身を支え、反対に問題が生じるとストレスとなって自身を脅かす。これらは、その時々に人が友人に対してどのような気持ちで接するかによって、変わってくると考えられる。この時の感情のなかの怒りは自らの中で意識して起こるものではなく沸きあがってくるものであるため、青年にとっては影響が大きいと考えられる（遠藤・湯川,2012)。

第２節 青年期の友人関係について

岡田（1995）は1980年代以降、現代青年の友人関係は、不安定な自己を共に支えあおうと親密で互いの内面を開示し合う大切な他者として認識するような伝統的青年観が希薄化し、表面的に円滑な関係を取る傾向を指摘している。上野・上瀬・松井・福富（1994）の研究では、このような現代青年の交友関係において仲間集団への同調性が重視されるとともに心理的距離が大きいことを指摘し内面的な密接さと外面的な行為とが区別されているとしている。

一方で、藤井（2001a）は心理的距離のとり方の研究から、友人関係について青年期後期の大学生は、みずからが安定する友達を選び、それ以外の相手とは無用な密着や同調は行われなくなるとし、同時に、その友人間においてはお互いに深くかかわって相手の心を理解する優しさと、表面的なお互いを傷つけないやさしさとが混同されているため、表面的な関係から踏み出せない距離のとり方と互いを尊重し柔軟に距離を取ることとを区別しにくいとも述べている。落合・佐藤（1996）は同性の友達とのつきあい方が青年期において年齢とともにどのように変化するのかを明らかにするため、友達とのつきあい方の特徴を調べている。そのなかで、友達とのつきあい方を６因子にまとめ、２次元に整理分類した。その

* 本学大学院心理臨床学専攻修了生　　** 本学大学院心理臨床学専攻教授
***元本学大学院心理臨床学専攻教授

結果、青年期における友達とのつきあい方の発達的変化において、女子は人間関係に対する関与の強さが男子より表れており、お互いがひとつになるような関係を望んでいると推察するとともに、発達的変化が大きいことを示している。そしてこのような変化に各自が対応していく必要から、友人関係において問題がおこりやすくなる一因が考えられるとしている。これらの先行研究から、青年期の友人は親からの自立に向けてのよき同伴者であるとともに、その対人関係は同質性が高いゆえの問題を含んでいるということができる。特に、女子青年の友人関係には、同性同士の結びつきが重要になってくると述べられている（金子,1989）。長沼・落合（1998）は同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係において、男子は同性の友達とは親密というより、内面を隠した分離したつきあい方をしているのに対して、女子は、青年期のどの段階でも見られる特徴として、同性の友人と密着した関係を持っているため、ありのままの自分を出してつきあい、傷ついても本音でつき合おうとするし、友達に頼って相談し相手を独占したい傾向があるとしている。また、発達的に見て大学生としての特徴は自分と合わない人とつきあうことはほとんどしなくなるが、一方で、つきあっている人とは相手を信じるつきあい方をしており、励まし合う関係を持っている。そのなかで自己理解を深めていくとともに、背景には被愛願望をもちつつ相互援助的・親和志向的であることを示しているとしている。

第３節　怒りについて

怒りは日常的に起こる感情体験であり、生得的に備わっており、進化の過程で形作られたそれ以上分割できない特有の様式を持つ６つの感情「喜び・嫌悪・驚き・悲しみ・怒り・恐れ」であるとする基本感情理論の１つとして取り上げられている（Ekman & Friesen,1975）。また、北山（1998）は、日常経験する感情の多くは社会的、文化的状況などが相互に連携をとりあい、共振することによって、醸し出された一種の神経・心理・社会的な複合プロセスであると考えている。中井（2012）によれば、怒りは、感情、行動、認知の３つの成分の組み合わせであり、攻撃性や敵意の中心概念として考えることができるとしている。そして、怒りの外的な表出という考え方と攻撃性という概念とは重複する部分があるが、怒りは感情として、攻撃性は行動として定義されることが多いと述べている。また、怒りの特性からくる怒りの表出は、程度や頻度によって対人関係に影響を及ぼし、介入目的とみなされるので、臨床心理学のなかでは、主に制御や緩和を意図する立場から検討されることが多い。これは、社会的関係に影響を及ぼしうることを意味していると同時に精神的、身体的にも影響を及ぼす可能性が大きくなることを示し、特に心疾患に与える影響が取り上げられている（渡辺・小玉,2001）。そして、中井（2012）は、怒りが日々の生活において接触する機会が多い相手に生じやすい感情である（遠藤・湯川,2013）ことから怒りを制御することは日常生活の中でバランスのとれた、対人関係を維持することに役立つと述べている。

次に、大学生を対象に湯川・日比野（2003）は怒り経験時には、驚愕や抑うつといった感情もともに喚起されることを見出している。また、怒りが強く喚起されるほど攻撃行動を行いやすいが、そのとき抑うつを伴うと思考を回避しやすい傾向があるとし、さらに、他の人にその出来事を聞いてもらうという社会的共有は女子の方が行いやすいことを明らかにしている。また、怒りの維持過程を検討している遠藤ら（2012）は、怒りは出来事中にのみ生じるのではなく、出来事後も再体験されその状態が一定期間続くことでいつまでも怒りから解放されず、維持されることを見出だしている。この思考の未統合感は、回避行動を促進しやすいことも確認している。同じく遠藤ら（2013）は、大学生においては対人関係場面において怒りが生じやすい（増田・金築・関口・根建,2005）ことから、怒りの喚起場面と対象について分析しており、その結果、大学生における怒りの喚起場面は、他者による明確な悪意の存在が推察される行為や状況であり、一方で、他者による過失や自己に関するものは非常に少ないと述べている。また、大学生になると生活時間の配分は自身にまかされている度合いが高いため、共に過ごす他者も自分の意思で選ぶことができることから、日々の生活において接触する機会が多い友人や恋人といった好意や親密感が伴う相手や、大学やバイト先の先輩同輩といったつきあいを維持しなければならない相手に怒りを感じやすいことが示されているとしている。

第４節　青年期における内的作業モデルについて

内的作業モデルとは、Bowlby（1969,1973）によってとなえられた、人の愛着行動（attachment：アッ

タチメント）による愛着対象（母性的人物）との持続的な相互交渉を通して、その人の内部に形成される愛着対象および自己に関する心的表象である（戸田,1991）。

Bowlby（1969 ,1973）によれば、愛着行動とは「他者を求め、他者に接近しようとする行動である。」とし、この行動システムは、生活環境との相互作用、特にその環境における主要な存在である母親との相互作用の結果として乳児自身のなかに発生するとしている。その時に重要なのは、「その人の愛着人物たちがだれであり、その人物たちにどのような反応を期待できるか」という愛着人物に対する有用性についてのその人の考え方という他者についてのモデルであり、「自分自身が自分の愛着人物たちの目にどのように受容されているか、あるいは受容されていないか」という相手から見た自分に対する有用性についてのその人の考えである自己についてのモデルである。これら2つのモデルは、お互いに相補的に強められながら働き、個人のうちに発達し、やがて、新しく直面する状況や関係性のなかで機能しながら個人の行動のもととなっていく。大学生を対象とした嶋田・田中（2005）の研究では、幼少期の安定したアタッチメントが青年期における内的作業モデルの安定に関連していることを示すとともに、自分が何らかの変化をもたらされるようなポジティブな経験を他者との間ですることによって、幼少期の内的作業モデルの安定が低かったものでも、高くなる可能性があるとしている。なお、変化のきっかけとなる他者は「友達」が全体の半分以上を占めていると述べている。また、内田・河合・大田・大東（2010）は青年期における内的作業モデルとパーソナリティとの関係から、成人愛着理論は、親密な関係における認知・感情・行動の個人差を説明するため、Bowlbyの愛着理論を拡張する形で発展してきたとしている。そして、ストレンジ・シチュエーション法によってAinsworth, Blehar, Wafers, &Wall（1978）が観察研究した乳幼児の愛着スタイルに対応したものとして、Hazan & Shaver（1987）はBowlbyの愛着理論をもとに青年・成人においても安定型、回避型、不安/アンビバレント型を設定し、愛着スタイルという概念が十分に適応可能であることを示し成人の愛着理論を提唱している（島,2008）。この観察研究で分類された愛着スタイルは、養育者との相互作用において形成された内的作業モデルが行動として表出されたものであり、成人期の愛着行動は幼児期のみではなく、その後の人生を通して全般的に機能するということを示唆するものであるとしている（金政,2007）。

続いてBartholomew & Horowitz（1991）は青年・成人期での愛着の様式（愛着スタイル）を自己についてのモデルと他者についてのモデルという2次元でとらえ、それらがポジティブであるか、ネガティブであるかによって4類型で表している（金政,2006・島,2008）。これは自己や他者への信念や期待の違いによる個人差として考えられる（金政,2006）。さらに、その後、Brennan,Clark & Shaver（1998）は“親密な対人関係尺度（Experiences in Close Relationships inventory : ECR）を作成し、自己モデルがポジチィブであるということは愛着対象から見捨てられるかもしれないという「関係不安（見捨てられ不安）」が低いということであり、他者モデルがポジチィブであるということは愛着対象との親密な関係を回避しないという「関係回避（親密性の回避）」が低いとして理解されるものであるとの見解を示している。この尺度は恋人を対象としているため、日本語版を中尾・加藤（2002）が一般化された他者を想定した愛着スタイル尺度として作成し、その信頼性と妥当性を検討している。

山口（2012）は、青年期における内的作業モデルと怒りとの関連について検討しており、対人関係にまつわる不安と関連している内的作業モデルにおける否定的な自己モデルを反映する関係不安は、その傾向が高いほど、怒りと攻撃性が高いことを示している。一方で、対人志向性と関連している内的作業モデルにおける否定的な他者モデルを反映する関係回避はその傾向が高いほど怒りと攻撃性が低いが、怒りの抑制や敵意に負の影響を与えているため、怒りや攻撃性を顕在的に表出しないが、潜在的には怒りや攻撃性を体験していることを示唆していると述べている。このように、怒りは青年期の内的作業モデルと深く関連していると考えられる。

第5節　目的

以上の先行研究の結果を総合的にみていくと、同性同士の結びつきが重要になっている女子大学生の友人関係に対する影響として考えられる対人関係においての感じ方と怒りに注目することは有用であると考え、女子大学生における友人関係から怒り感情と対人関係に深くかかわっている内的作業モデルとの関連を検討することとした。そこで、本研究では

女子大学生の友達とのつきあい方を、落合ら（1996）の研究をもとに「深狭」、「浅狭」、「深広」、「浅広」という4つのパターンに分類し、各群と内的作業モデルおよび対人関係の中で起こってくる怒りとの関連性について、以下のような仮説にもとづいて検討することを目的とする。

仮説1.人と深く狭くかかわるつきあい方の人は、愛着対象との親密な関係不安や関係回避が低く、怒りを制御する。
仮説2.人と浅く狭くかかわるつきあい方の人は、愛着対象との親密な関係回避が高く、怒りを抑制する。
仮説3.人と深く広くかかわるつきあい方の人は、愛着対象との親密な関係不安が高く、怒りを表出する。
仮説4.人と浅く広くかかわるつきあい方の人は、愛着対象との親密な関係不安や関係回避が高く、怒りを制御しない

第2章　方　法

第1節　調査対象

近畿圏の大学に在籍する女子大学生314名に質問紙調査を行い、不備が見られなかった303名を分析対象とした。（年齢範囲18歳から23歳、平均年齢18.99歳、標準偏差1.08 ）

第2節　調査時期および手続き

2014年7月に質問紙を授業時間内に配布し、調査用紙はその場で回収した。

第3節　調査内容

調査用紙の表紙には、参加は任意であることやプライバシーは保護されることをふくめた調査主旨の説明文および連絡先を記載した。フェイスシートは所属する学科、学年、年齢を記入してもらい、以下のように3種類の質問紙調査を実施した。

（1）友達とのつきあい方に関する尺度（落合ら, 1996）

友人関係については、「本音を出さない自己防衛的なつきあい方（防衛的）」（13項目）、「誰とでも仲良くしていたいというつきあい方（全方向的）」（6項目）、「自分に自信をもって交友する自立したつきあい方（自己自信）」（6項目）、「自己開示し積極的に相互理解しようとするつきあい方（積極的相互理解）」（4項目）、「みんなと同じようにしようとするつきあい方（同調）」（4項目）、「みんなから好かれることを願っているつきあい方（被愛願望）」（2項目）で構成したものを5件法で実施した。落合ら（1996）は、一次因子分析によって得られた6因子間の相関と内容をみると因子間にはまとまりがあると考え、友達とのつきあい方の特徴をまとめるために二次因子分析をおこない、友達とのつきあい方を「深く狭くかかわるつきあい方」「浅く狭くかかわるつきあい方」「深く広くかかわるつきあい方」「浅く広くかかわるつきあい方」の4つのパターンに分類した。

（2）The Experiences in Close Relationships inventory-the-generalized-other-version ＜親密な対人関係体験尺度- 一般他者版（以下ECR-GOと略記）＞（中尾・加藤,2004）

対人関係において一般的に体験している気持ちや感じ方については、対人関係における不安と関連する内的作業モデルの自己モデルをあらわしている「見捨てられ不安」（18項目）と愛着対象との親密な関係を回避する、あるいはしないという対人志向性と関連する内的作業モデルの他者モデルをあらわしている「親密性の回避」（12項目）で構成したものを5件法で実施した。

（3）State-Trait Anger Expression Inventory＜日本語版（以下STAXI と略記）＞（鈴木・春木, 1994）

怒り感情と表出についてはSpielberger（1988）による状態―特性怒り尺度（STAS）と怒り表出尺度（AX）を合せてまとめられた尺度を4件法で実施した。本研究においては、怒りが外に出るのを抑えようとする傾向である「怒りの制御（Anger-Control）」、怒りを外部（他人や物）に向ける傾向である「怒りの表出（Anger-Out）」怒りを内にためる（心の中に抱く）傾向である「怒りの抑制（Anger-In）」から構成されているAXを使用した（24項目）。また、STASは「状態怒り（State Anger）」（10項目）と「特性怒り（Trait Anger）」（10項目）をそれぞれ測定する2つの尺度からなっているが、本研究においては、対人関係に影響が強いと考えられるパーソナリティ特性として、怒りやすさの個人差が測定でき

る「特性怒り（Trait Anger）」のみを使用した。

第３章　結　果

第１節　友達とのつきあい方に関する尺度とECR-GOおよびSTAXI（AX）の因子分析の結果および記述統計

調査対象者全体の欠損値については平均値を代入したうえで、有効数303名に対しての回答をデータ行列として因子分析を行った。共通性を反復推定し主因子法による初期解を求めた。なお、因子の解釈に用いる項目は.35以上の負荷量をもつことを基準とした。あわせて各尺度の信頼性を検証するためChronbachのα係数を算出し信頼性分析を行った結果は以下のようになった。また、友達とのつきあい方に関する尺度とECR-GOおよびSTAXIの平均値と標準偏差は以下の通りであった。

（１）友達とのつきあい方に関する尺度に関しては、累積寄与率が52.55％であり、初期解での固有値の減衰状況から因子数は３もしくは４が適切であると判断しプロマックス回転を行った。因子構造の解釈可能性や先行研究（落合ら,1996）との結果の整合性から４因子を採用した。結果、内的整合性は第１因子「同調」α＝.928、第２因子「自己防衛」α＝.888、第3因子「自立」α＝.863、第４因子「自己開示」α＝.808であった。このことから、落合ら（1996）の研究を支持する結果が得られたといえた。

（２）ECR-GOに関しては、累積寄与率が38.43％であり、初期解での固有値の減衰状況から、因子数は２が適切であると判断し、プロマックス回転を行った。因子構造の解釈可能性や先行研究（中尾ら,2004）との結果の整合性から２因子を採用した。内的整合性は第１因子「関係不安」α＝.924、第２因子「関係回避」α＝.764、であった。このことから、中尾ら（2004）の研究を支持する結果が得られたといえた。

（３）STAXIのうち怒り表出尺度（AX）に関しては、累積寄与率が36.87％であり、初期解での固有値の減衰状況から、因子数は２か３が適切であると判断し、プロマックス回転を行った。因子構造の解釈可能性や先行研究（鈴木ら,1994）との結果の整合性から３因子を採用した。内的整合性は第1因子「怒り制御」α＝.775、第2因子「怒りの表出」α＝.787、第3因子「怒りの抑制」α＝.705、であった。このことから、鈴木ら（1994）の研究を支持する結果が得られたといえた。

表１　友達とのつきあい方に関する尺度の平均値と標準偏差

	友達とのつきあい方			
	同調	自己防衛	自立	自己開示
平均値	2.80	2.25	2.88	2.78
標準偏差	1.04	.76	.79	.76

表２　ECR-GOおよびSTAXIの平均値と標準偏差

	ECR-GO		STAXI			
	関係不安	関係回避	特性怒り	怒りの制御	怒りの表出	怒りの抑制
平均値	1.97	2.99	2.22	2.57	2.73	2.36
標準偏差	.73	.67	.57	.56	.56	.53

第２節　ECR-GOとSTAXIおよび友達とのつきあい方に関する尺度の相関係数

各尺度の変数間の関連を検討するために相関分析をおこなった。その結果を表３に示す。最初に、ECR-GOとSTAXIの相関を見ていくと「関係不安」は「特性怒り」と有意な弱い正の相関（r＝.397，p ＜ .01）、および「怒りの抑制」と有意な中程度の正の相関（r＝.411，p ＜ .01）が認められた。「怒りの制御」とは非常に弱い負の相関（r＝-.137, p ＜ .05）が認められた。「関係回避」は「怒りの表出」（r＝.286，p ＜ .01）・「怒りの抑制」（r＝.232，p ＜ .01）と有意な弱い正の相関が、「怒りの制御」とは有意な非常に弱い正の相関（r＝.178，p ＜ .01）が認められた。

次に、ECR-GO・STAXIと友達とのつきあい方をみていくと、「関係不安」は「同調」（r＝.376，p ＜ .01）・「自己防衛」（r＝.359，p ＜ .01）とは有意な弱い正の相関が、「自立」とは有意な中程度の負の相関（r＝-.401, p ＜ .01）が認められた。「関係回避」は「自己防衛」と有意な中程度の正の相関（r＝.518，p ＜ .01）が、「同調」（r＝-.371，p ＜ .01）・「自己開示」（r＝-.334，p ＜ .01）とは有意な弱い負の相関が認められた。「特性怒り」は「自己防衛」と有意な非常に弱い正の相関（r＝.114，p ＜ .05）が、「自立」とは、有意な非常に弱い負の相関（r＝-.164，p ＜ .01）が認められた。また、「怒りの表出」は「自己防衛」と有意な弱い正の相関（r＝.208，p ＜ .01）が、「自立」とは有意な弱い負の相関（r＝-.219，p ＜ .01）が、「自己開示」は有意な非常に弱い負の相関（r＝-.195，p ＜ .01）が認められた。そして、「怒りの抑制」は「自己防衛」と有意な弱い正の相関（r

＝.379 ，p ＜ .01 ）が、「自立」（r＝-.165 ，p ＜ .01 ）・「自己開示」（r＝-.130 ,p ＜ .05 ）とは有意な非常に弱い負の相関が認められた。「怒りの制御」と友達とのつきあい方には相関が見られなかった。

以上の結果から「関係不安」と「関係回避」は、「特性怒り」と怒りの表出の仕方と友達とのつきあい方において、中程度～非常に弱い範囲で相関があることが示された。 そして、特性怒り・怒りの表出の仕方は、友達とのつきあい方と弱い～非常に弱い相関があることが示された。

表３　ECR-GO・STAXIおよび友達とのつきあい方に関する尺度の相関係数

	ECR-GO		STAXI				友達とのつきあい方			
	関係不安	関係回避	特性怒り	怒りの制御	怒りの表出	怒りの抑制	同調	自己防衛	自立	自己開示
ECR-GO										
関係不安	－	-.029	.397**	-.137*	.003	.411**	.376**	.359**	-.401**	.079
関係回避		－	.065	.178**	.286**	.232**	-.371**	.518**	-.107	-.334**
STAXI										
特性怒り			－	-.339**	-.381**	.498**	-.002	.114*	-.164**	-.076
怒りの制御				－	.564**	.025	-.019	.087	.104	-.015
怒りの表出					－	-.017	.094	.208**	-.219**	-.195**
怒りの抑制						－	-.079	.379**	-.165**	-.130*
友達とのつきあい方										
同調							－	-.021	-.204**	.169**
自己防衛								－	-.166**	-.134*
自立									－	.324**
自己開示										－

** p＜.01　* p＜.05

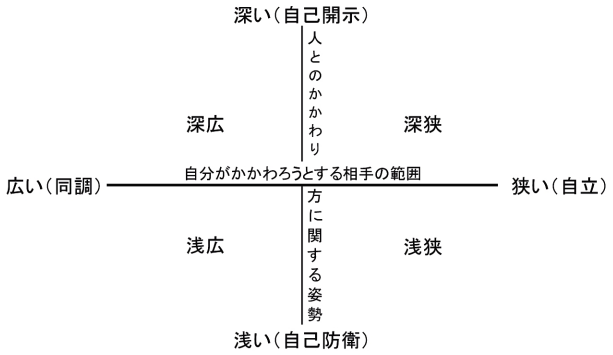
第３節　友達とのつきあい方に関する群分けおよび４パターン

友達とのつきあい方に関する尺度の下位項目を因子分析により４つにまとめた。それらは、どの人とも仲良くあわせていくつきあい方の「同調」、自分の本音を隠すことで自己の内面を閉鎖し自分を守るつきあい方の「自己防衛」、他の人と迎合することなく自分を保ち、自信を持ったつきあい方の「自立」、自己開示しマイナスがあっても本当の自分を隠さず接するつきあい方の「自己開示」であった。それぞれの因子名の平均点を基準として高群と低群の２群に分け、その組み合わせによって友達とのつきあい方に関して４つのパターンに分類した。（表４）。それらは縦軸に防衛的関与である（自己防衛）と積極的関与である（自己開示）を「人とのかかわり方に関する姿勢」という外に見えにくい、いわば内面の覚悟や姿勢の因子をおき、横軸には全方向的である（同調）と選択的である（自立）を「自分がかかわろうとする相手の範囲」という外的な側面ともいえる因子をおく落合ら（1996）の研究をもとに、高群・低群の組み合わせることで、本研究に沿った形となるように各群に分けた（図１）。因子名については、落合ら（1996）の「防衛的関与」、「積極的関与」、「全方向的」、「選択的」を、本研究の「自己防衛」、「自己開示」、「同調」、「自立」とそれぞれに対応させた。

図１　友達とのつきあい方の４パターン

	深狭	浅狭	深広	浅広
同調	低群	低群	高群	高群
自己防衛	低群	高群	低群	高群
自立	高群	高群	低群	低群
自己開示	高群	低群	高群	低群

表４　友達とのつきあい方に関する群分け



第４節　友達とのつきあい方4パターンとECR-GOおよびSTAXIとの関連性

友達とのつきあい方４パターンを独立変数、ECR-GOとSTAXIを従属変数として１要因の分散分析をおこなった（表５）。その結果は「関係不安」（F（3，91）＝19.58，p＜.001)、「関係回避」（F（3，91）＝13.32，p＜.001）で有意な群間差がみられたので、TukeyのHSD法（５％水準）による多重比較をおこなったところ、「関係不安」においては浅広群が一番高く、深広群は深狭群と浅狭群より高かった。「関係回避」においては浅狭群が一番高く、浅広群は深狭群と深広群より高かった。次に、「特性怒り」（F（3，91）＝2.92，p＜.05)、「怒りの表出」（F（3，91）＝3.55，p＜.05)、「怒りの抑制」（F（3，91）＝10.73，p＜.001）でも有意な群間差がみられたのでTukeyのHSD法（５％水準）による多重比較をおこなったところ、「特性怒り」においては浅広群の方が深広群より高かった。「怒りの表出」にお

いては浅広群の方が深狭群より高かった。「怒りの抑制」においては浅狭群と浅広群の方が、深狭群と深広群より高かった。

表５　友達とのつきあい方４パターンとECR-GOおよびSTAXIの因子得点と分散分析の結果

	友達のつきあい方4パターン				F値	多重比較
	深狭 (N=28)	浅狭 (N=20)	深広 (N=18)	浅広 (N=29)		
ECR-GO						
関係不安	1.68	1.65	2.23	2.87	19.58***	深狭≒浅狭＜深広＜浅広
（SD）	0.58	0.58	0.62	0.81		
関係回避	2.70	3.70	2.77	3.23	13.32***	深狭≒深広＜浅広＜浅狭
（SD）	0.56	0.70	0.55	0.58		
STAXI						
特性怒り	2.18	2.31	2.08	2.52	2.92*	深広＜浅広
（SD）	0.62	0.47	0.55	0.53		
怒りの制御	2.48	2.67	2.62	2.57	*n.s.*	
（SD）	0.52	0.66	0.53	0.49		
怒りの表出	2.60	2.69	2.86	3.04	3.55*	深狭＜浅広
（SD）	0.58	0.61	0.58	0.43		
怒りの抑制	2.23	2.73	2.31	2.79	10.73***	深狭≒深広＜浅狭≒浅広
（SD）	0.43	0.45	0.34	0.49		

***p＜.001　**p＜0.1　*p＜.05

第５節　STAXIとECR-GOおよび友達とのつきあい方に関する尺度の重回帰分析

STAXIとECR-GOおよび友達とのつきあい方の影響を検討するために、STAXIを従属変数にECR-GOと友達とのつきあい方を独立変数とする重回帰分析をおこなった（表６）。結果、「特性怒り」の説明率はＲ２＝.183で有意であり（F（6，296）＝12.25，p＜.001）、関係不安はβ＝.516（p＜.001）、「同調」はβ＝-.158（p＜.05）であった。次に、「怒りの制御」の説明率はＲ２＝.054で有意であり（F（6，296）＝3.87，p＜.001）、「関係不安」は、β＝-.172（p＜.05）、「関係回避」はβ＝.212（p＜.01）、「同調」はβ＝.140（p＜.05）、であった。また、「怒りの表出」の説明率はＲ２＝.157で有意であり（F（6，296）＝10.34，p＜.001）、「関係不安」は、β＝-.180（p＜.01）、「関係回避」はβ＝.286（p＜.001）であり、「同調」はβ＝.243（p＜.001）、「自立」はβ＝-.177（p＜.01）であった。そして、「怒りの抑制」の説明率はＲ２＝.272で有意であり（F（6，296）＝19.78，p＜.001）、「関係不安」はβ＝.447（p＜.001）、「同調」はβ＝-.201（p＜.001）、「自己防衛」はβ＝.185（p＜.01）、であった。

表６　STAXIに対するECR-GOと友達とのつきあい方の影響

	STAXI			
	特性怒り	怒りの制御	怒りの表出	怒りの抑制
ECR-GO				
関係不安	.516***	-.172*	-.180**	.447***
関係回避	.046	.212**	.286***	.044
友達とのつきあい方				
同調	-.158*	.140*	.243***	-.201***
自己防衛	-.107	.060	.093	.185**
自立	.029	.087	-.177**	.042
自己開示	-.098	.025	-.057	-.105
Ｒ２（調整済み）	.183***	.054***	.157***	.272***

***p＜.001　**p＜.01　*p＜.05

ECR-GOに対する友達とのつきあい方の影響を検討するために、ECR-GOを従属変数に友達とのつきあい方を独立変数とする重回帰分析をおこなった（表７）。結果、「関係不安」の説明率はＲ２＝.372で有意であり（F（4，298）＝45.68，p＜.001）、「同調」はβ＝.279（p＜.001）、「自己防衛」β＝.332、（p＜.001）、「自立」β＝-.351（p＜.001）、「自己開示」β＝.190（p＜.001）とそれぞれにおいて有意であった。

次に、「関係回避」の説明率はＲ２＝.436で有意であり（F（4，298）＝59.28，p＜.001）、「同調」はβ＝-.333（p＜.001）「自己防衛」β＝.479（p＜.001）「自己開示」β＝-.204（p＜.001）と「自立」を除いて有意であった。

表７　ECR-GOに対する友達とのつきあい方の影響

	ECR-GO	
	関係不安	関係回避
友達とのつきあい方		
同調	.279***	-.333***
自己防衛	.332***	.479***
自立	-.351***	-.029
自己開示	.190***	-.204***
Ｒ２（調整済み）	.372***	.436***

***p＜.001

第４章　考　察

本研究の目的は女子大学生の友人とのつきあい方によって、内的作業モデルと怒りとの関連を検討することであったので、愛着の個人差を反映する内的作業モデルの自己モデルと他者モデルに基づいた対人関係における感じ方を測定したECR-GOと特性怒り・怒りの表出の仕方（怒りの制御・怒りの表出・怒りの抑制）を測定したSTAXIの関連性について検討した。特に、友達とのつきあい方は４パターンにわけたもので関連を検討した。

第１節　友達とのつきあい方因子とECR-GOおよびSTAXIとの関連性

研究の結果、ECR-GOとSTAXIの関連性については、対人関係にまつわる不安と関連した否定的自己モデルを反映する「関係不安」とは山口（2012）の結果を支持するものであったが、対人志向性と関連した否定的な他者モデルを反映する「関係回避」とは山口（2012）の結果を支持しないものであった。

表３よりECR-GOとSTAXIの関連性について「関係不安」と「特性怒り」および「怒りの抑制」は正

の相関が見られ、「怒りの制御」は負の相関がみられたことから、「関係不安」が高いと相手に対して許容範囲が狭くなるため怒りやすい性格傾向となり、怒りをうちにためてしまうと考えられる。また、怒りが外に出るのを抑えようとしなくなるとも考えられる。

次に、「関係回避」と「怒りの表出」、「怒りの抑制」、「怒りの制御」とは正の相関がみられたことから、「関係性の回避」をすることは、その時点で他者との距離を広くとっており、信頼関係が薄い状態にあるといえるため、他者に対する親密性の回避傾向が高くなると、怒りを溜め込むとともにその表出の仕方は内に外にと両方に向かっていくと考えられる。

続いて、ECR-GOおよびSTAXIと友達とのつきあい方因子との関連性については、表３よりECR-GOと友達とのつきあい方因子との関連性について検討した結果、「関係不安」、「関係回避」とも「自己防衛」的因子とは正の、「関係不安」と「自立」的因子、「関係回避」と「自己開示」的因子とは負の相関を示していた。また、STAXIと友達とのつきあい方との関連性について検討した結果、「特性怒り」、「怒りの表出」、「怒りの抑制」において「自己防衛」的因子とは正の、「特性怒り」と「自己開示」的因子を除く「自立」、「自己開示」的因子とは負の相関を示していることから、「関係不安」「関係回避」と「特性怒り」・怒りの表出の仕方はおおむね、友達とのつきあい方の「自己防衛」、と「自立」「自己開示」とが対応する関連を示していた。これらのことは、落合ら（1996）が示した友達とのつきあい方を構成する「人とのかかわり方に関する姿勢」、「自分がかかわろうとする相手の範囲」のそれぞれの因子と、本研究の因子の関係が示すものとはおおむね共通した傾向があると考えられる。ただし、「同調」的因子は「関係不安」と「関係回避」に対して反対の関連を示していたことから、不安を軽減しようと相手に合わせるつきあい方をしているとともに、関係回避することで同調しなくてもよくなると考えられる。また、「関係不安」が起こるときは、自分を守ろうとする「自己防衛」的な機制が働く（松下・吉田,2007）とともに、「関係回避」の度合いも高くなると考えられる。落合ら（1996）が「同調」的なつきあい方と「自己防衛」的なつきあい方は仲間外れを恐れてなされると述べていることと共通している結果と言える。そして、「自立」的因子は、自信をもったつきあい方であるため「関係不安」が低いと考えられるし、積極的に自己開示することは、関係保持につながるため「自己開示」的因子は関係回避が低いと考えられる（長沼ら,1998）。男女を研究対象としている落合ら（1996）によると、大学生の友達とのつきあい方の特徴は、根底に相互の信頼がある「自己開示し積極的に相互理解しようとするつきあい方」を挙げており、これらは女子大生だけを対象にした本研究の結果においても共通する傾向として示された。

第２節　友達とのつきあい方４パターンとECR-GOおよびSTAXIとの関連性

友達とのつきあい方を組み合わせて、友人関係を２つの特徴を持った４パターンの群に分けたうえで（表４）、友達とのつきあい方とECR-GOおよびSTAXIの関連をみるために分散分析をおこない検討した結果（表５）、自己開示し積極的に相互理解しつつ、自立して限られた人とつきあう「人と深く狭くかかわるつきあい方の人（深狭）は、関係不安や関係回避が低い」という仮説が支持されたといえるが「怒りを制御する」という仮説は支持されなかった。先行研究では自己モデルがポジティブであるということは関係不安が低いということであり、他者モデルがポジティブであるということは、関係回避が低いということを示している（Brennan et al,1998）。これらをみていくと、「深狭」は本音をだして心をうちあけ、互いに分かり合おうとするため、安心して自分をだせる友人を選ぶようになり（落合ら,1996）、友人の範囲は狭くなると考えられる。また、本音を出す相手を選ぶというつきあい方は、狭い範囲の友達関係であっても、支えあう関係となると考えられる。ただし、大学生は、それまでの学生生活と違って、親や教師に依存することも減り、自己決定の下で日常生活を比較的自由に生活できる（遠藤ら,2013）ことから、怒りの制御が必要な場面は避けやすいと考えられる。そのため、怒りを外に出すのを抑えようとする傾向との関連は見られなかったのではないかと考える。

第２に、限られた人とだけ、自分の本音は出さず自分を守り防衛的にかかわるつきあい方である「人と浅く狭くかかわるつきあい方の人（浅狭）は関係回避が高い」という仮説は支持されると共に「怒りを抑制する」という仮説も支持された。先行研究の山口（2012）によると、関係回避の傾向が高いほど

怒り感情が低いことが示されていた。そして、関係回避が高いことで、怒りを顕在的に表出しないが、潜在的には体験していることを示唆していると述べられている。これらから、「浅狭」は防衛的で狭い範囲での関わり方のため、否定的感情の体験を回避している（遠藤ら,2012）と考えられる。特に大学生は、「過去の出来事に対して目指すべき方向に解決されていない、受容できない、脅かされると感じる」ことで回避行動を促進し、さらに回避行動によって反復思考を増加させるという怒りの維持過程が指摘されている（遠藤ら,2013）。また、現代青年の特徴として“希薄化した”友人関係が指摘されている（岡田,1995）ことは、関係回避的な一面と考えられる。このような表面的に円滑な関係を取る傾向は周囲の人間との衝突を避けてはいるが、自分の本心を出さないということで、結果的には自分のなかに怒りや葛藤を抱えてしまうと考えられる。

第3に、自己開示し積極的に相互理解しようとし、誰からも愛されようと誰とでもつきあう「人と深く広くかかわるつきあい方の人（深広）は関係不安が高い」という仮説は支持されたといえるが「怒りを表出する」という仮説は支持されなかった。先行研究の山口（2012）によると、関係不安の傾向が高いほど怒り感情が高いことが示されていた。これらから、「深広」は、関係不安が高く、自分の対人関係を敏感に感じると同時に、自己肯定感をその関係性から維持しようとしている（土井,2008）ため、不安が高くなると考えられ、誰とでもあわせた同調的なつきあい方になっていると考えられる。ただし、「深広」は、不安が高いときに積極的に自己開示できるかという矛盾を含んでおり「深広」は、お互いに深くかかわって相手の心を理解するやさしさと、表面的なお互いを傷つけないやさしいとが混同されることになり、友人関係におけるジレンマとして内在化されることになると考えられる（藤井,2001b）。

最後に、誰とでもつき合うが、自分の本音を出さない「人と浅く広くかかわるつきあい方の人（浅広）は関係不安や関係回避が高い」という仮説は支持されたといえるが「怒りを制御しない」という仮説は支持されなかった。ただし、分散分析の結果から「特性怒り」、「怒りの表出」、「怒りの抑制」は4群の中で「浅広」が一番高くなっていたことから、怒りやすい性格傾向となり、怒りを出すことも、溜め込んでしまうこともしやすいつきあい方であると考えられる。先行研究では、自己モデルがネガティブであるということは関係不安が高いということであり、他者モデルがネガティブであるということは関係回避が高いということを示している（Brennan et al , 1998）ことから、「浅広」は、外面的な行為として仲間集団への密着性を示すと同時に心理的な内面の密接さが低いという外面の行動と内面的な密接さが区別されている（上野ら,1994）つきあい方であると考えられる。そのために不安は高く、自分の安全性を高めようと防衛的に（佐藤,1995）広くつきあおうとしているのであり、内面では関係を回避していると考えられる（遠藤ら,2013）。

第3節　STAXIに対するECR-GOと友達とのつきあい方因子の影響とECR-GOに対する友達とのつきあい方因子の影響

STAXIに対するECR-GOと友達とのつきあい方因子の影響とECR-GOに対する友達とのつきあい方因子の影響を検討するために重回帰分析をおこなった（表6、表7）。その結果、表6の説明率は有意であったが低い数字であった。次に、表7の説明率は有意であり、高い値とは言えないが、ECR-GOを含めたSTAXIに対する影響を説明しているものよりもよく説明できている値が示された。これらから、友達とのつきあい方因子の違いは「関係不安」、「関係回避」に対して影響をあたえている要因であるとは言えるが、ECR-GOを含めた友達とのつきあい方因子の違いは、STAXIに対して十分説明できる要因とは言いにくいものであった。ただし、「同調」はSTAXIのいずれの項目にも影響がみられることから、誰とでもあわせるつきあい方は、かかわる範囲が広いため、特性怒りや怒りの表出の仕方に影響があるのではないかと考えた。

第4節　今後の課題

本研究においては、女子大学生の友達とのつきあい方の違いが内的作業モデルの自己モデルと他者モデルである関係不安と関係回避に及ぼす影響は大きく、関連が深い要因となっていることが示された。しかし、女子大学生の友達とのつきあい方の違いと特性怒りや、怒りの表出の仕方との関連は少なく、要因としても大きな影響をおよぼしていないことが示された。以上のことから、「特性怒り」・怒りの表出の仕方は友達とのつきあい方以外の要因があるのではないかと考えられる。ただし、「関係不安」、「関係回避」と「特性怒り」・怒りの表出の仕方には

関連が見られたことから、遠藤ら（2013）は、大学生のみ、怒りの維持過程において、回避行動が反復思考を増加させるという過程を示すと述べているため、友達とのつきあい方が「関係不安」や「関係回避」に対して影響を及ぼしているということが明らかにされたということは、日常生活において友達と適応的な対人関係をむすぶ上で、怒り特性・怒りの表出の仕方の今後の手がかりになると考えられる。また、今回は、怒りという対人関係における他者への陰性の特性や表出の仕方を検討していったが、他にも対人関係上、日々の生活において影響する要因があると考えられることから、怒り以外の要因を取り上げ検討していく必要があると考える。さらに、本研究においては調査対象者を女子大学生に限定し、大学１年生の比率が高かったことを考慮すると、今後は男女差を検討することにより、女子大学生の特徴をより明らかにすることができるとともに、学年差の比較検討も必要になってくると考えられる。

本論文は修士論文の一部を基に再構成したものであり、本研究の実施に際しては多くの方々のご協力とご示唆を得えたことをここに深く感謝いたします。

引用文献

Ainsworth, M, D., Blehar, M. C., Waters, E.,&Wall, S（1978）*Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation*

Bartholomew, K & Horowitz, L . M. (1991) Attachment styles among young adults:

A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244

Bowlby, J.（1969）Attachment and loss : Vol. 1. Attachment. New York : Basic Books. （黒田実郎他 訳 1976 母子関係の理論Ⅰ 愛着行動 岩崎学術出版社 ）

Bowlby,J.（1973）Attachment and loss : Vol. 2. Separation : Anxiety and anger. New York : Basic Books. （ 黒田実郎他 訳1977 母子関係の理論Ⅱ 分離不安 岩崎学術出版社 ）

Brennan, K. A., Clark, C.L., & Shaver, P. R.（1998）Self-report measurement of adult attachment : An integrative overview. In J. A. Simpson & W.S.Rholes （ Eds. ）, *Attachment theory and close relationships* New York : Guilford

土井隆義（2008）友だち地獄－「空気を読む」世代のサバイバル 筑摩書房

Ekman & Friesen（1975）. Unmasking the face.New Jersey: Prentice-Hall.（エクマン，Pフリーセン，W. V. 工藤 力（約編）（1987）表情分析入門 誠信書房）

遠藤寛子・湯川進太郎（2012）怒りの維持過程―認知および行動の媒介的役割― 心理学研究，82 ，505-513.

遠藤寛子・湯川進太郎（2013）大学生における怒り喚起の場面と対象―高校生との比較を通じて― 筑波大学心理学研究，45，33-38.

Erikson, E. H.（1959）Identity and the Life Cycle. New York : International Universities （小此木啓吾訳編 1973 自我同一性 誠信書房）

藤井恭子（2001a）大学生の友人関係における心理的距離のとり方 茨城県立医療大学紀要，6，69-78

藤井恭子（2001b）青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究，49，146-155

Hazan,C. & Shaver, P. R.（1987） Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524

金子俊子（1989）青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究，3，10-19

金政祐司（2006）わたしから社会へ広がる心理学―第２章 わたしが他者を見る時、他者と関わる時― 北樹出版

金政祐司（2007）青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連 社会心理学研究，22，3，274-284

北山 忍（1998）自己と感情―文化心理学による問いかけ：共立出版

増田智美・金築 優・関口由香・根建金男（2005）怒り自己陳述尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 行動療法研究 31，31-44

松下姫歌・吉田芙悠紀（2007）現代青年の友人関係における“希薄さ”の質的側面 広島大学大学院教育学研究科紀要 3，56，161-169

長沼恭子・落合良行（1998）同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究，10，35-47

中井あづみ（2012）怒りと怒りの近似概念の操作的

定義の異同および怒りの操作的定義に影響を与えた要因、明治学院大学心理学紀要、22、13-30
中尾達馬・加藤和生（2002）成人愛着スタイル尺度（ECR）の日本語版作成　九州大学人間環境学府心理学教室（未公刊）
中尾達馬・加藤和生（2004）.一般他者を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討　九州大学心理学研究，5 ，19-27
岡田努（1995）　現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察　教育心理学研究，43，354-363
落合良行・佐藤有耕（1996）青年期における友達とのつきあい方の発達的変化 教育心理学研究，44，55－65
佐藤有耕（1995）高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析　神戸大学発達科学部研究紀要，3，11-20
嶋田美由紀・田中雄三（2005）青年期の対人関係が内的作業モデルの変化におよぼす影響　鳴門生徒指導研究，15，16-29
島　義弘（2008）アタッチメントは対人行動にどのように反映されるのか―パーソナルスペースによる検討―　55，71-76
Spielberger,C.D.（1988）*Manual for the State-Trail Anger Expression Inventory*（*STAXI*）. Odessa, FL : Psychological Assessment Resources.（堀　洋道（監修）吉田富二雄（編）2004心理測定尺度集Ⅱ　サイエンス社）
鈴木　平・春木　豊（1994）怒りと循環器系疾患の関連性の検討　健康心理学研究，7，1-13
戸田弘二（1991）Internal Working Models研究の展望　北海道大学教育学部紀要，55，133-143
上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護（1994）青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究，42 ，21-28
湯川進太郎・日比野桂（2003）怒り経験とその鎮静化過程　心理学研究，74，428-436.
内田利広・河合三奈子・大田千登世・大東映美（2010）日本における内的作業モデルに関する研究の現状と今後の展望　京都教育大学紀要，117，99-114
渡辺俊太郎・小玉正博（2001）怒り感情の喚起・持続傾向の測定―新しい怒り尺度の作成と信頼性・妥当性の検討― 健康心理学研究，14 ,32-39
山口 正寛（2012）青年期における内的作業モデルと共感性および怒りとの関連 心理臨床学研究 ，29（６），717-727